
凜、初めてじゃないおつかい

正雪花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凜、初めてじゃないおつかい

【Nコード】

N1980L

【作者名】

正雪花

【あらすじ】

凜が初めてじゃないおつかいに出る話。

その1

四月十六日。

私は両腕を広げて、道路わきにある白線の上を歩いていた。隣りには、小学校で初めての友達になってくれた山岸真由子ちゃんの姿もある。私たちは、二人して学校から帰るところだった。

真由子ちゃんは、私よりずっとずっと可愛らしい。七歳にしてすでに清楚さというものを感じさせる、日本人形のような彼女。そんな彼女に対して、私は延々と一方的に——自慢話をしているのだった。

何の話か？

決まっている。

お母さんの話だ。

驚くなかれ、私のお母さんは名前を岡本華子といって、世界的に有名な画家なのだ。ニューヨークとパリにアトリエを持ち、現地で絵を描く合間には指導もするという超一流の絵描きである。

彼女の絵は世界中で人気を博し、彼女自身も各地を忙しく飛び回っている。よって、滅多なことでは日本に帰ってくることはない。

それゆえに、一人娘である私も、彼女との思い出はほとんど持ち合わせていないのだ。いや、それどころか、正直に言うところ……、直接会った記憶すらない。

だけど、彼女は私にとって一番大切に、尊敬する、たった一人のお母さん。

私はそういうことを、くるくる回りながら喋った。すでに白線の上からは落ちてしまっていた。

お母さんに会った記憶がない、なんて人によってちょっと悲しいぐらいの事実かもしれない。が、真由子ちゃんは驚いたり笑ったりして、機嫌よく聞いてくれていた。たぶん、私がいまにも嬉々として話をしていたからだろう。

そう、私は会った覚えもないお母さんのことを、何よりも自慢に思っていたのだった。できたてはやはやの友達に、真っ先に知ってもらいたいほどに――。

が、その時、

「はんっ、お前のかーちゃんが日本に帰ってこないのって、誰かさんのことが嫌いだからじゃねーの？」

突然、背後から予期せぬ暴言が飛んできた。

振り向けば、そこには同じクラスの中里裕也の姿があった。学年でも一番意地悪な男子ということでは有名な奴だ。

「なんだよ、うるさいな。勝手に話に入ってくるな」

私はぷりぷりと腹を立てながら言った。

「――お母さんのこと、何にも知らないくせにっ」

真由子ちゃんと並んで、彼のことを睨みつける。

が、中里裕也はそんな私たちの視線に怯むことなく続けた。

「だってよー、もう何年も帰ってきてないんだろ。いくら忙しいつつてもお正月ぐらい帰ってくるでしょ、普通なら」

普通なら、という部分を妙に強調して嫌みったらしく言う。

こんな奴に大好きなお母さんのことをからかわれるなんて……、私は本気でムカついてきた。

「あんたはバカな小学生だから世界的な画家がどんなに忙しいか知らないだけよ。いろいろ締め切りとか、人に教えたりとか、あるんだから。一枚の絵を完成させるのだって、何ヶ月も集中して描かないといけないのに」

つばを飛ばして反論する私。

しかし彼は鼻で笑い飛ばす。

「はっ、あのな、いいか。人間ってのはな、本当に心から会いたい人のところには、どんなに忙しくたって会いにくるもんなんだよ」どこで聞いてきたセリフかは知らないが、得意げな顔をして偉そうにのたまう。

頭にきた私は、徹底的にやり返してやろうと思うのだが、まず、

どう言い返せばいいのか分からなかった。だから、
「うるさいうるさいうるさい！ 私嫌われてないもん！ お母さんは本当に忙しいから帰ってこれないんだもん！」

とにかく力で押し返した。ただただ違う違うと言い続ける。

そんな私に、真由子ちゃんも加勢してくれる。

「そうよ、よく知りもしないで、いい加減なこと言わないの」
さすがに二対一では分が悪いと思ったのだろうか。

「へっ、うるせーブス！」

中里裕也は捨て台詞を吐いて、そのまま走り去ってしまった。
彼の背中がどんどん小さくなって、やがて角を曲がって見えなくなる。

残された私たちは、住宅街の道の真ん中でぽつんと立ち尽くすしかなかった。

「何なのあいつ」

真由子ちゃんが頬を膨らませて、自分のことのように怒ってくれる。そして、心配そうな顔をして私を気遣ってくれた。

「凜ちゃん、あいつの言うことなんて、気にしないでいいからね」

「……うん、分かってるよ」

私は大きくうなずいてみせた。

が、しかし。

表向きは強がってみせても、心の中には確かな不安が芽生えているのだった。

（どんなに忙しくても、本当に会いたければ帰ってくる、か……）

お母さんはもう何年も、日本には帰ってきていない。

私だって、本当はもっととはっきりと否定してやりたいのだ。勢いだけではなく、しっかりと根拠を示して反論してやりたい。

だけど、今の私にはそれだけの材料がないのだ。

なにしろ、お母さんのことはあまりよく知らない。私が生まれてから二年ほどは一緒に暮らしていたらしいのだが、そんな小さなころの記憶なんてあるはずもないし……。

新聞、雑誌、テレビ、父親の話——そういうものである程度の知識はある。そして、電話でなら話したこともある。

が、実際に会ってかけてもらった言葉というのは、一つとして思えない。

生の言葉というのは、もしも覚えていれば、強く心のよりどころとなったと思うのだが……。

「……くう……」

先ほどとは一転して、口数が少なくなってしまう私。

真由子ちゃんはそんな私と並んで歩きながら、鋭く胸中を察してくれた様子。それから別れるまでのあいだ、ずっと励まし続けてくれるのだった。

私はそんな友達に心の中で感謝しつつ、それでもやっぱり、どうしても元氣が出せないのだった。

※

その日の夕方。

私は、晩ご飯を作るお父さんのお手伝いをしていた。キッチンに並んで立ち、二人して要領よく作業を進める。

今日のメインはエビフライだ。お父さんが隠し包丁を入れて真っ直ぐに伸ばしたブラックタイガー。私はその一つ一つに、たっぷり衣をつけていく。

エビの背中を伸ばし終わり、油を温めていたお父さんが、ふと思いついたように呟く。

「そうそう、今週末、お母さんが帰ってくるようになったから——」

「——え？」

何を言われたか分からなかった。一瞬、真っ白な時間が過ぎる。

が、私はすぐにその意味を理解して、驚きのあまり手に持っていたブラックタイガーを落っことしてしまった。

「ほ、本当に？」

お父さんは、私が落としたエビを拾い上げながら、

「ああ。日本に帰ってくることは前から決まっていたんだけど。家に帰ってこれるか分からなかったんだ。で、それがオツケーになったらいい。日曜日だけなら、一日家に居れるってさ——」

どつきゅーん。

私はその言葉に、胸を撃ち抜かれた。

卵と小麦粉とパン粉まみれの手をそのままに、放心する。

「お、お母さんが帰ってくる……お母さんが……おか……」

手を動かしてくださいと注意され、私は作業を再開させた。

が、頭の中はお母さんのことであっという間に集中できない。半ば無意識に腕を動かす。エビに小麦粉をつけ、卵をつけ、パン粉をまぶす。エビに小麦粉、卵、パン粉、エビに小麦粉、卵、パン粉……。

（お母さんに会える……）

お父さんがブラックタイガーを油に投入していく。しゅわしゅわという小気味の良い音。

そのあいだにも私は、心臓をどきどきさせてお母さんのことを考えていた。

なんだか、憧れの有名人が我が家にお泊りにやってくる、そんな感覚だった。いやまあ、確かにお母さんは有名人であり、私の憧れでもあるのだが……。

実際にお母さんと会うのは、何年ぶりのことになるのだろう。五年ぐらいか。

私の方は当然として、きっとお母さんの方だって、今の私がどんなだからくに知らないはずで——。

そんな二人が顔を合わせるのだ。

一体、どうなってしまうのだろう。

パチパチと軽い音をたてながら、油の中でエビが踊る。こんがりと美味しそうに色づくそれを、じっと見つめながら考える。

お母さんはこんな私に会って、一日一緒に過ごしてみて、「何だ

このバカなガキは」などと思ったりしないだろうか。いや、お母さんがそんなことを言うキャラじゃないのは分かってるけど……。私だってそんなに素晴らしい子供じゃないのだ。似たようなことが絶対には言い切れない。

軽く身震いした。

（でも――）

そう。私にとっては、滅多にないチャンスなのだ。数年に一度の貴重な体験。

もしもその一日のあいだに、たった一言でも面と向かって「好きだ」とか「愛してる」とか言ってもらえたなら……。

もしもそんなことがあれば……。ぐじぐじと抱いていた私の不安なんて、きつと簡単に吹き飛ばしてもらえるのに。中里裕也にからかわれても、「お母さんは私に会いに帰ってきてくれて、私のこと好きって言ってくれたもんっ。だからあんたの言うことは全部ウソ！」、そう言い返してやれるのに。

（今週末かあ……）

私は瞬きも忘れて、一本一本取り出されるエビフライを眺めていた。胸の中で、期待と不安をごちゃ混ぜにしながら。

その2

今日は土曜日。お母さんが帰ってくる日だ。

私は自分のベッドの上でぼふぼふと飛び跳ねながら、お父さんがお母さんを連れて帰ってくるのを待っていた。

時計の針はすでに夜の八時を指している。

二人はまだ帰ってこない。

お父さんは朝から出かけた。いつもとは違う真新しいスーツに身を包んで、緊張した面持ちで家を出た。春の遊園地だとか何とか、そういうところに夫婦で招待された、みたいなことを言っていた気がする。帰りが遅くなるというのは聞いていたが、まさかここまでとは思わなかった。

私は完全に待ちくたびれていた。ベッドの上で意味もなく暴れまわる。スプリングがぎしぎしと音を立てる。

日中もずっと一人で過ごしていたのだ。自分の部屋を掃除したり、髪の毛を気にしてみたり、明日着る服を並べてみたり——お母さんと会う準備をしているうちに、一日が終わってしまった感じ。

（早くお母さんに会いたいのに……）

私はもう一度、窓の外を覗いてみる。が、やはりそこには誰の姿もない。

私の部屋には出窓があり、壁際に置かれたベッドの上からは、その出窓に肘を置くだけで家の前の道が見下ろせるのだ。

今日は何度も——ここ一時間だけでも数十回はそうして眺めてみるのだが、一向に二人の姿は見えてこないのだった。

（まったく、どこで遊び呆けているんだか。さすがにもう、家には向かってると思うんだけど……）

私はもう一度窓の外を確認する。そして再びため息を漏らすのだった。

一時間が経過し、私は出窓の部分にあごを乗せてぼけーっとしていた。

家の前には、相変わらず誰の姿も見えてこない。玄関灯と私の部屋の明かりに照らされ、夜道がぼんやり白くなっているだけ。

「ふあ……」

夜の九時といえば、普段なら寝ていてもおかしくない時間だ。だいたいぶたが重くなってきた。

（あー眠いかも……）

私は頭を振って眠気を飛ばす。

だめだ。寝るわけにはいかない。

今日はお母さんが帰ってくる日なんだから。

彼女が数年ぶりに家に帰ってくるというのに、娘である私が出迎えられない——なんてことがあってはならない。

「うん。私が、絶対、出迎えるんだから」

バシバシと頬を叩いて気合いを入れる。

そしてさらに一時間が過ぎた。

私はハリウッドで映画化できそうなほどの激戦を、睡魔相手に繰り広げていた。

ガクンと頭が揺れるたびに、何とか我慢しなくてはと思う。が、気付けばまた頭を揺らしてしまっている始末である。

見れば、肘のわきによだれの水溜りができていた。

（……だめだ、もっとがんばらないと。このままじゃ、寝ちゃう……）

大きくあくびをして、強く目をこする。

お母さんが帰ってくるんだ。数年に一度のチャンスなんだ。彼女との記憶がない私にとっては、初顔合わせといっても過言ではないのに。

お帰りなさいの一言も言えずに、起きたらすでに彼女がいた、なんてだめだ……。悲しすぎる……。

私は両手で頬を引っ張って睡魔を追い出す。

そしてまた時間が経った。

眠気は頂点を突き破って天まで届く勢いだった。

まだ何とか起きてはいたが、自分がどうして我慢していられるのかも不思議なほどの極限状態。身体は前後左右にふらふらと揺れて、その上で頭がぐりんぐりん回っている。

(……もうだめかも……出迎えたのに……これじゃ……もう……) 力の入らない身体ではバランスを取ることもできなかった。上体が後ろに傾いて、次の瞬間にはバフツとベッドに倒れ込んでしまう。正座するように膝を折り曲げたまま、あお向けで布団に埋まる。その布団の感覚が妙に気持ちよくて、私は意識が吞まれていくのをぼんやりと感じていた。

(お母さん……ごめん……)

夢を見た。

家の前にタクシーが止まって、助手席からお父さんが降りてくる。後部座席に回りこんで、車内の誰かから大量の紙袋を受け取っている。

そして、それでも処理しきれなかったたくさんの荷物を抱えて、一人の女の人がタクシーから降りてきた。

その人の顔を見た。

お母さんだった。

ボタン！ とドアの閉まる音。家の壁を伝ってわずかに感じる振動。

一瞬のうちに、私は意識の泥沼から引っ張り上げられた。目を開けると、天井が見えた。

弾かれたように上体を起こして、窓に張り付いて家の前を覗き込む。

女の人が、大量の荷物を持って、そこにいた。
顔を見た。

お母さんだった。

タクシーがエンジン音を響かせて遠ざかっていく。

私は布団がまとわりつくのも気にせずベッドから飛び降りた。
数歩行かずに足を取られて顔面から転倒。足に絡まりつく布団を蹴り離して立ち上がり、体当たりする勢いでドアを開けて転がるように階段を下りる。

眠気なんて一気に吹き飛んでいた。

（——お母さんが帰ってきた！）

私が息を荒げて階段を下りきったとき——、

彼女は玄関のドアを開けたまま、廊下に荷物を置いていたところだった。

階段の下で、なす術もなく立ちすくむ私。ただただ、自分の母親の姿を眺めていることしかできない。

驚くことに、彼女は和服姿だった。それ以外は最近見た写真と変わらない。肩までかかる髪、やわらかな物腰、そして整ったキレイな顔立ち。全体からおしゃれな雰囲気を漂わせていて、お母さんというよりはお姉さんという印象。

彼女は尋常ではない量の荷物を積みあげていた。そのあまりの多さを見て、やっぱり忙しい人なんだと思う。

後ろから、さらにたくさんさんの荷物を抱えたお父さんが入ってくる。あまりにも緊張していたせいで、私は何も声がかけられなかった。それどころか、指の一本さえ動かすことができない。ただ立ち尽くす。まさに直立不動といった感じで。

お母さんはそんな私の姿を見て、「会いたかったよ」とか「元気にしてた?」とかいろいろと声をかけてきてくれた。が、やっぱり私はそのほとんどにろくな反応ができない。バカみたいにカチコチになって引きつった照れ笑いを浮かべているだけ……。

お母さんが屈んで、ほっぺを合わせてきた。ときどきして心臓が

破裂するかと思った。外の空気にさらされていたせいか、彼女の頬はひんやりと冷たい。

お父さんが最後の荷物を運び込んで、ドアを閉めている。

お母さんの前では、いい子にしていなければならない。バカな子供だと思われて、嫌われるようなことがあってはならない。絶対に。その一心だった。

だからその後、お母さんと同じ部屋で過ごしても、自分からは話し掛けることができずにいた。

一緒にお風呂にまで入ったのだ。お母さんが身体を洗ってくれた。が、私はそのあいだも人形のようにされるがままでいるしかなかった。

緊張しすぎて、生きた心地がしなかった。

いつ布団に入ったのかも覚えていない。

その3

翌日。

日曜日なのに珍しく早起きした私は、朝からお父さんにくつついて歩いた。まだお母さんと二人になるには抵抗があった。緊張してしまうのだ。父をあいだに挟めば、少しは楽になる。

遅い朝食を終えて洗い物を済ませたお父さんが、飲み物を片手にお母さんの部屋へと向かう。私もその足に寄り添うようにして階段を上る。

最近は全然だけど、昔はお父さんだって絵を描いていたのだ。まあ趣味の範囲でのことだけど。で、そのお父さんがアトリエとして使っていたのが、普段は家にいないお母さんの部屋だったのだ。

お父さんが部屋のドアを開ける。私も足を踏み入れた。

ずっとそんな使われ方をしてきたお母さんの部屋に——いま、彼女本人が立っていた。私は初めて目にする光景に見入ってしまう。

お母さんの部屋にいる、お母さん——。

言葉にすれば当たり前のことが、今の私にはとても新鮮に感じられた。父のズボンをぎゅっと握りしめて、言いようのない感慨にひたる。

空気を入れ替えるためだろうか、南の窓は全開にされていた。春のやわらかい風が吹き込んできて、部屋の空気をかき混ぜている。

お母さんは何やら絵を描く準備をしている様子だった。お父さんのエプロンを着けて腕まくりし、イーゼルにカンバスをセッティングしている。

休みの日にまで、家に帰ってきてまで、まだ絵を描かなくてはいけないのかと不思議に思う。しかもこんな早い時間から……。

そんな風に思っている私の前で、彼女はお父さんと立ち話をはじめた。手にはお父さんに渡された飲み物が握られている。

「——、——買いに行こうか？」

「いいよ、どれでも適当なので。今日一日で描き終わるから。じゃないと明日間に合わないし——」

「——でもその人もすごいな。世界のHANAKO OKAMOTOにタダで絵を描かせようってんだから」

「さらっと描くけどね。昔からの悪友で……。ずっと一人で生きていくもんだと思ってたあの子が結婚だもん——」

私はお父さんの足に隠れるようにして、話をしているお母さんの表情を盗み見る。

休みの日にまで絵を描かなくてはいけないというのに、辛そうな色は微塵もなかった。やわらかい笑顔である。

いつもお父さんが言っていたことを思い出す。

「なにしろ、彼女は世界的な才能だからね。もう死ぬまでずっと絵を描くことを世界に命じられているんだよ。彼女が一枚でも多く作品を残せば、それはそのまま世界の財産になる——」

私は今まで、そんな生き方を強制されてお母さんは本当に幸せなのだろうかと思っていた。

私なら、ずっと一つのことをやれ、しかも寝る間も惜しんで、俺たちのために——なんて言われたら絶対に嫌になるし、やってやらないと思う。

だから、きっと辛い日々を送っているんじゃないかと思っていた。だけど——、実際に彼女を見ると、そうでもなさそうだった。

真っ白いキャンバスに向かい、腕組みをしているお母さん。頭の中で構図を考えているのだろうか。その目はキラキラと輝いているようにさえ見える。

もしかすると彼女は、本当に絵を描くことが好きで好きでしょうがないんじゃないかと思えてくる。

お母さんがキャンバスに向かうスムーズで余裕のある動作。絵を描きながらいるという感じがビンビン伝わってくる。まだ何も描いていないうちから、すでにかっこいい職人という印象だ。雰囲気があった。

さすがは世界一の画家だと、改めて思う。

「——ああ、そう、昨日行方不明になったあのカバンだけど、中に絵の具類が全部入ってたのね——」

「ええ、大丈夫なの？」

「うん、まあそれしか入ってなかったし。そのうち帰ってくると思うけど。でも今日一日の絵の具がないのよね……。ある？ 別に何でもいいんだけど……」

「ええ？ どうだろう、もしかしたらないかも……」

お母さんが「なんでないのよー」と子供のように頬を膨らませ、可愛らしい抗議の声をあげた。

お父さんは情けなく心当たりの場所を探しはじめる。

「いやー、ここ最近全然描いてなくてさ、全部捨てちゃった記憶があるなあ。また次描き始めるときに買えばいいやと思って——」

信じられないといった様子で目を丸くして「えー」と言うお母さん。私も声をあげて加勢する。

二人のブーイングを背に、最後はゴミ箱まで覗き込んでいたお父さんが言う。ついに諦めたという顔だった。

「んー、やっぱりないなあ。じゃあ、買いにいつてくるか。ほら、あそこ。○×堂」

「え？ あそこまだあるの？」

「あるよ、勝手に潰すなよ。まだがんばってるよ」

「へー、よかったあ。このあたりももう全然景色変わってるからね、つきりなくなってるかと思った。ほら、一番最初になくなりそうじゃない」

お母さんはそう言って、お父さんと笑い合った。私はまたぼけーっとその笑顔を見上げる。

「じゃあ、ちゃちゃっと思ってくるよ」

「そっか、ありがと。じゃあ私はそのあいだに下描きでも済ませちゃおうか。さすがにボールペンはあるよね」

ボールペンで下描きってなんじゃい、そう私が度肝を抜かれてい

ると、

——ピリリリリ。

携帯の着信音が部屋に響いた。

お父さんのズボンのポケットの中から聞こえている。

ちよつとごめんと言つて、お父さんが電話に出た。

少し話して——、

「ごめん、用事が入った。すぐに行かなきゃ。ちよつと出てくる」

お母さんに向かって申し訳なさそうに手を合わせる。

「あらそう、分かった。じゃあ、絵の具も私が買いに行くよ」

「ごめんな、ゆっくり描かせてやりたかったのに。あ、それか、凜がおつかいしてくれるか？」

お父さんが笑いながら、足元の私に視線を投げかけてきた。まあ冗談だということは分かっていたが、私は間髪入れずにうなずいた。

「うん」

自分で言っておきながら、お父さんはびっくりしている。それもそのはず。私はたまにおつかいに行かされるが、基本的に嫌々引き受けているのだ。普段は文句ばかり言っている私が、こんな風に即答することはまずない。

見れば、驚いているのはお父さんだけではなかった。

お母さんは目を丸くして、「おつかいなんかさせてるの？」と父に聞き、「おつかいなんかしてるの？」と私に聞いてくる。

「うん、たまに」

私がそう答えると、お母さんは怖い顔をしてお父さんを見た。父は弁解するように、

「まあ、二人で暮らしてるんだから仕方ないよ。慣れてもらわないといけないし。心配だけど凜はちゃんとやってくれてるって。それに、必ず最初の数回は一緒に行ってるもん、な、凜？」

私は黙って首肯。

それでもお母さんは申し訳なさそうに私を見て、

「○×堂にも行ったことある？」

そう聞いてくる。

「……」

少し考えるが、そういえばそんなところには行った覚えはなかった。

「大丈夫か？ 無理なら別にいいんだぞ？」

お父さんまで心配そうに私の顔を覗き込んでくる。

私はこくりと力強くうなづく。

「全然へいき。らくしょーだから」

だって——私が無理だと言えば、お母さんが行くことになるのだ。せっかくの休みの日、しかも今日中に一枚の作品を描き上げないといけないという状態で——どうして彼女に行かせることができるのか。

私は暇なのだ。私が行ってくる。

おつかいぐらいできるところを見せてやる。

そう心に決めていた。

それでもまだ心配、といった面持ちの二人に、声を張って言う。

「地図書いて」

憧れの人に、使えない子供だと思われたくない。褒めて欲しい——確かにそういう気持ちも少しはあった。いや、だいぶあった。

でも、結局のところ私は、お母さんの役に立ちたかったのだと思う。

外国から帰ってきたばかりなのだ。長い時間飛行機にも乗っていただろうに、日本に帰ってきてからもいろいろと用事があっただろうに、それでも疲れている素振りすら見せない彼女。

ちょっとしたおつかいではあるが、それでも彼女の負担を少しでも減らせるのであれば——わずかな時間でも有効に使ってもらえるようになるなら——、

近くまで画材を買いに行くことぐらい、何てことはない。

初めての場所にいきなり一人で行ったことはないけれど、別に遠

くはないのだ。いつも行っているコンビニやスーパーと距離的には変わらない。

なおも心配そうに気遣ってくれるお母さんを手で制して、私は出立の準備にとりかかるのだった。

※

そして私は出発する。

格好はこうだ。

もう春で暖かくなってきたので、上着はエンジェルオレンジのチェックシャツ重ね着風半袖Tシャツ一枚。

下はナナコラバーズの裾折り返しデニムショートパンツ。ユイシヤンの分厚いボーダーオーバーニーソックスに、靴はホイウエイのスエードブーツ。

そしていつもの「おつかいバッグ」を背負う。

これには、住所氏名年齢電話番号などの情報や、防犯ブザー、コンパス、折り畳み傘、軍手、保存食など、いろいろなものが入っている。おつかい兼、防犯兼、防災兼、避難バッグといったもの。

いろいろ入っているだけに結構かさばっているが、逆にこれが道端で休憩するときなどに便利なのだ。ちょっとしたソファア代わりになってくれる。

「行ってきます」

お母さんは、玄関先まで見送りにきてくれた。

私はその心遣いに敬礼をして、ドアを開けて家を出る。

お母さんに心配をかけまいと、悠然を装って。……内心はどきどきだった。

だって、普段お父さんに頼まれているどうでもいいおつかいとは訳が違うのだ。いつもなら品物を間違えて買ってきたり、多少帰りが遅くなろうとも気にはしない。が、今日はそういう訳にはいかない。

なんせ、世界一の画家が使う画材を買いに行くのだから。

買い間違える訳にはいかないし、彼女は今日中に一枚の絵を完成させなくてはならないのだ。あまり遅くなってもいけない。

うまくやらなければという重圧がすごい。

私の七年の人生で感じる最大のプレッシャーだった。

門扉を出て、一つ目の角まで歩いた。

道を曲がる前に振り返ってみると、お母さんが家の前まで出てきて見送ってくれていた。そんなに心配なのだろうか。

——心配されたくない。

そう思った。

だから私は、元気に手を振ってみせる。

そして、別にこんな全然平気だよという顔をして角を曲がった。お母さんの姿が見えなくなる。その時になってようやく、私は出発したんだという気になれたのだった。

その4

目的地である画材屋さん、○×堂はいつもおつかいをしているコンビニやスーパーとはまったく逆の方向にあった。距離的には同じぐらい近場なのだが、こっちのゾーンにはあまり来たことがない。そのせいか、家を出てしばらく歩いた私の前には、早くも見慣れない風景が広がっているのだった。

私は知らない道の真ん中に立ち、ごくりと生唾を飲み込む。先を見ると、道はさらに知らない場所へと続いているようだった。

「大丈夫、大丈夫」

私は自分にそう言い聞かせ、勇気を振り絞って歩を進める。入り組んだ路地を抜け、線路の下をくぐり、大きな交差点を渡る。するとやがて、田んぼなるもののまでが目の前に姿を現したのだった。

「……田んぼって……」

本当に、異国の地に迷い込んでしまったかと思う。

こんな場所が家の近くにあったことに驚く。自分が普段、いかに決まった道しか歩いていないのかを思い知らされた。

通り過ぎる人たちまでもが、異国の住人のように見えてしまう。迷子になっても、彼らに話し掛けることだけはできないかもしれない。

日本語は通じるだろうが、聞き取れない方言で返されたらどうしよう……。

（——やっぱり今日は、これだけが頼りだ）

そう思って、お父さんの書いてくれた地図に目を落とす。

よほど娘のことが心配だったのか信頼できなかったのか、地図には異常なまでに詳細な説明が付け加えられていた。曲がり角にあるお店はすべてに名前が書かれているし、道の途中にもところどころ——ここからは何が見えるのだの、何に気をつけろだのと書き込まれ

ている。

さすがにこれだけ懇切丁寧に書かれた地図があれば、迷うこともないだろう。

ただ、だからこそ――、これをなくしちゃうとヤバイと思う。
（これはどこかに置いたり、ポケットに入れたりしないで、ずっと左手に握りしめていよう……。家に帰るまで……。そうすれば、なくしたりすることはないのだから……）

そう思いつつ歩を進め、やがて大きな家の前を通りかかったとき、事件は起こった。

その家には、玄関にどでかいガレージがあったのだ。十メートルはあろうかというほどの長い長い可動式の黒柵。

私とその前を通り過ぎようとした時だ。

「バウバウバウバウバウバウバウ！」

突然、横からものすごい大音声が発せられた。

とっさにガレージの中を見れば、そこには自分の三倍以上はある大きな黒い犬が――ミサイルのようにこちらに向かって突進してきていたのだ。

「――ひっ！」

驚きのあまり息をのんで立ち尽くす私に、狂犬は鋭い牙を見せて襲い掛かってきた。

ガシャーン！

犬はものすごい音を立てて金属の柵に頭から激突。勢いが付き過ぎていて、その身体ごと宙に弾き飛ばされる。が、彼は空中で器用に体勢をたてなおすと四つ足でしっかりと着地、再び私に向かって走り寄り、手を出せば食いちぎられるという至近距離から吠え立ててくる。

「バウバウバウバウバウバウ！」

突然の出来事に、瞬時には反応できなかった私。

足が動くようになってようやく、倒けつ転びつ逃げ出した。

全身の毛を逆立てつつ無我夢中で走って、目に付いた電柱の陰に

飛び込む。

コンクリートの柱に背中中のバッグを押し付けて、自分はそのバッグに埋もれるほどに身体を縮める。

後ろが気になって顔だけを出して覗いてみると、あの犬は追いかけては来ていないようだった。全身からどっと汗が噴き出した。

ぜえぜえと肩で呼吸をして、その体勢のまま心臓が落ち着いてくれるのを待つ。

「……はあはあ……。んくっ……。なんだあれ……」

——マジびびった。

死ぬかと思った。

安心したせいだろうか、今になって恐怖が追いついてきたせいだろうか——なぜだかはよく分からなかったが、とにかく涙が溢れてきた。

大粒の涙が次から次へと湧き出てくる。それらはボロボロと目から零れ落ち、上着に染み込んで消えていく。

私はしゃくりあげるようにして泣いた。

「ふああああああああああああああん」

私は、自分が何に泣いているのかも分からないまま、盛大に声をあげた。

そしてしばらく——、電柱の陰に隠れながら、背中中のバッグにもたれかかりながら、泣き続けたのだった。

あのバカ犬はガレージから出られない、そう分かっているても身体の震えが止まらない。

ぎゅっと両手で身体をかき抱く。

どれぐらいそうしていたか。

やがて震えも涙も止まったころには、かわりに腹立たしさがこみ上げてきていた。

あんなバカ犬にかかずらって時間を無駄にしてしまった。それが口惜しかった。

——いつまでもこうしてはいられない。

私は立ち上がって、先を急ぐことにする。

「ガレージの中でも首輪ぐらいつけろってんだ」

来た道に向かって文句を言い、回れ右して歩き出す。
腹立たしさも収まらないまま。

※

「あうあっ！」

ずっしやああああ——。

私は何かにつまづいて、豪快に宙にダイブ。

真正面から地面にヘッドスライディングをかましていた。

アスファルトの道のだ真ん中に、カエルのようにへばりつく。

「——つつう……」

痛みのあまり顔をゆがめて呻き声をあげる。

涙目になりながら、自分は一体何につまづいたのだろうと不思議に思った。

上体だけを起こして背後を振り返ってみれば、そこには——、
可愛らしい小石が一つ、あるばかりだった。

「……っ」

よく小石につまづくとかいう言葉を耳にはするが、あれは小説や歌の歌詞なんかで比喩的に使われる場合がほとんどで、実際にはあんな数十グラムほどの物体で転ぶ人間なんていないのだ。

そう思っていた。

今までは。

「……ひぐっ……」

無性に悔しくなってきた。

あんな小石で転ぶよりは、バナナの皮で転ぶ方が何倍もマシな気がする。少なくとも、バナナの皮は踏めば普通に転べる。

時間が経って、地面で打った部分がじんじんと痛みはじめた。
なぜだか涙が溢れてくる。どんどんどんどん溢れてくる。

そして――、

「ふああああああああああああああああん」

私は派手に泣いた。

――もう本当に転ぶとか最悪。お気に入りの服が汚れてしまったじゃないか。

私は地面に座り込んで、ニーソックスをめくる。膝からは絶対に血が出ているはずだと思って確認するが、赤くなっているだけで血は出ていなかった。

これがまたなぜか悔しい。

またしても私は道端に引っ込んで、バッグにもたれかかって座って過ごした。痛みが引いて、涙が止まって、再び元気が出てくるまで――。

どれぐらい時間が経っただろう。

私は立ち上がって、前を向いた。

――お母さんが待っているのだ。こんなことぐらいでくよくよし
て時間を無駄にしているはいけない。

彼女の心配そうな顔が頭をよぎる。

（お母さんを安心させるためにも、ちゃんとおつかいを済ませて、
早く帰らないと……）

背中 of バッグをしっかりと背負いなおして、服の前をパンパンと叩き、私は再び歩き出すのだった。

その5

すっかり涙も乾いて元気になった私は、地図を頼りにぐんぐん進んでいた。

横断歩道を渡り、公園を横切り、見知らぬ土地を闊歩する。まるで父に手を引かれているかのように迷いなく歩いていく。

するとやがて、百メートルほど先に目的のお店が見えてきた。看板も出ている。

「画材専門店・〇×堂」

私は嬉しくなって急いだ。足取りも軽くなる。大きなバッグをバタバタさせて駆ける。

いい感じだった。それほど時間もかからずに到着することができた。

途中で二回泣いたが、あれはどちらもアクシデントというか、単に運が悪かったで済ませられる話なので、全体としてはまあ順調な方だ。

お店の正面まで走り寄り、私は胸をときめかせながらその建物を眺めた。

思っていたよりも、ちゃんとしたお店だった。もっと小さくてボロい建物を想像していたが、一見すると小さなスーパーのような感じ。大きな文房具屋さんと言った方がいいか。結構しっかりした造りになっていた。

そつと窓から中を覗いてみると、高価そうな額縁なんかが並んでいて、さすが専門店といった印象だ。

私は興奮と緊張を抑えて、ドアを抜けて店内へと足を踏み入れた。店に入ってまず気になったのは、その独特の匂いだった。絵の具の匂いだろうかと思うが、ほのかに――すえたような甘いような不思議な匂いが漂っている。そういえば、お母さんの部屋もこれと似たような匂いがしていた気がする。

嫌な匂いではなかった。

私は、頭をくらくらさせながら、意味もなく店の中を歩き回る。そこそこ広い店内には、ところせましと色々なものが並んでいた。壁には大小様々な額縁がかかっていて、その下にはイーゼルもたくさんある。紙や布は数え切れないほど揃っていたし、色ペンにいたっては何百という色がグラデーションするよう几帳面に整理されていた。

隅の一角には、漫画用の画材コーナーまである。

（——絵の具はどこだろう）

そう思って、私は背の高い棚の後ろに回りこんでみた。するとそこには壁一面に——大量の絵の具がみっちりと陳列されているのだった。

私は息を飲んだ。

「すごい……」

床から天井まで、右から左まで——色も種類もさまざま絵の具が、美しく詰め込まれている。

まったく、どれを買えばいいのか分からない。

が、それも大丈夫。

お父さんが描いてくれた地図の裏には、買うべきものの名前が記されているのだった。

私は強く握りしめすぎてくしゃくしゃになった紙を丁寧にのばして、その字を確認する。

「……アクリルガッシュ……十二色入り……千五百円……」

「……ふーむ……」

この中から一つだけ探し当てるなんて大変だぞ、そう思って視線を巡らせる私の目の前に、それはあった。

「アクリルガッシュ12色入り」と書かれた箱入りセット。

一番目立つところにあるということは、定番の売れ筋商品ということなのだろうか。

（でも、これ……安いなあ……）

十二色も入って、千五百円だとは。ちょっと見るだけでも、上の方には一色で三千円という絵の具もあるのに。

量が少ないからなのかなあと思う。

が、うーん。

お母さんが使うには安物なんじゃないかと思ってしまふ。だって彼女は世界一の画家なんだから。世界一の画家なら、道具だって世界一のものを使わなくてはいけないんじゃないか。

しかし、お金は二千円しか渡されていなかった。

やっぱりこれで合ってるんだと思う。

「うん、合ってる」

私はもう一度確認すると、レジへ向かった。

カウンターの中には、いかにも絵が好きそうなヒゲ親父がいた。

おそらくはこの店のオーナーか何かだ。

この人も絵が好きだからこんなお店を開いているのだろう。

たとえば彼に、「岡本華子って知ってる？」そう聞けば、いったいどういう反応を示すのか。私は彼女の娘なんだぞと自慢をすれば、どれだけ驚いてくれることだろう。

そんなことができれば、きっとものすごく誇らしい気分になるに違いない。

「千五百円です」

が、私は聞けなかった。

そもそも私は人見知りで、知らない人にこちらから声をかけるなんてできっこないのだ。「ひとりでおつかい？ えらいね」などと話しかけてくれれば大丈夫なんだけど……。

しかし残念ながら、絵好きなヒゲ親父は子供などに全く興味がない様子で、黙々と自分の作業に戻っていた。

私は店を出るまで、岡本華子の娘が画材屋に来てるんだぞと念じつつ歩いた。が、結局何ごともなくドアを出て外の空気を吸うのだった。

まあ、絵好きはあれぐらい大人しい方がいいのだ、そう思ってい

るときに気が付いた。

——ここはお父さんが昔から通っていた画材屋さんで……そうだ、お母さんも知っていた。きっと彼女も何度か来たことがあるのだろう。

(あ、)

じゃあ、私が自慢しても、そんなにびっくりされなかったかもしれない。

(……危ない危ない)

あやうく知っている人に「これ知ってる？」と偉そうに聞くマヌケな奴になってしまったところだった。

親父さん、声をかけてくれなくてありがとう。

そう思いつつ、私は店を後にした。

※

(——よし、狙いの買い物が済んだから、もう怖くないぞ)

私は店を出て、来た道に戻っていた。右手に真っ黒なビニール袋を振り回しながら。

おつかいは順調に進んでいる。後は家に帰りさえすればいいだけだった。

簡単だ。

左手に握りしめた紙を見る。

お父さんが書いてくれた地図には、今回のおつかいとは関係のない道や、その周りにある店の名前なんかも詳細に書き込まれていた。少しでも娘が迷子になる確率を下げたい——そういう親心が透けて見える地図だった。

ふと、その地図の中に、コンビニを見つけた。ここからすぐ近く、公園の隣にあるらしい。

「……」

私は足を止めて、ポケットの中をまさぐる。

毎回、おつかいでおつりが出たら、それは好きに使ってもいいということになっていた。

手を開くと、中には四百円と少し残っている。
コンビニに行つて、飲み物とお菓子を買うのに、充分な金額だ。
道端で少し悩んで、私はくるっと方向転換。
自分へのご褒美というのも悪くないと思った。
地図を頼りに、コンビニへ向かう。

「いらっしやいませー」

よっこらせつとドアを肩で押し開けて中へ。

お茶と、お菓子は何にしようかな……と、オーソドックスにポテチを選択。

レジを済ませて、外へ。

扉を出ると、正面の大通りにはゴーゴーとたくさん車が行き交っていた。

右手には○×堂の黒いビニール袋。左手にはコンビニ袋。私は両手をふさがれたまま、しばし考える。

(手に持って帰るのは大変だから……)

隣りの公園に目をやると、そこには座って食べるのにちょうどいい感じのテーブルがあった。

私は、そこで食べてから帰ろうと決めた。

公園のテーブルに座り、ポテチの袋を開けていると、

「にゃー」

野良猫が一匹寄ってきた。

相当に太ってデカイ三毛猫。

きつと人間からエサを貰うことに慣れているのだ。私の足にアタックするように首をこすりつけてくる。

「痛い、痛い」

もはやヘッドバッドに近い勢いで頭をぶつけて、食い物を催促し

てくる。

「にゃーにゃーにゃー」

「うるさいなあ、好き嫌い多いクセに……」

私はポテチをやりたいけど、ポテチは食えるのか、あげてもいいのかが分からなかった。だから、ずっと猫の恨めしい視線を浴びながら、結局ひとりでたいらげたのだった。

少し心が痛む。

が、仕方ない。

私は思い出していた。以前、友達の猫に牛乳をあげて下痢にさせてしまったことを。

あれは苦い経験だった。まさか猫が牛乳もダメだったなんて……そんなの分かるわけがない。

あの一件から私は、本当に大丈夫だと確認が取れたもの以外は、猫にあげないようにしているのだった。

だから謝る。

「すまぬ……これもそなたのため……」

が、猫はなおもにゃーにゃーと鳴き続けるのだった。

しばらくすると、猫はいなくなった。

ポテチを食べきり、お茶を飲みきり、私もそろそろ出発することにした。

公園を出て、コンビニ前のゴミ箱に空いた袋を捨てに行くと——ちようどさつきレジを打ってくれた店員さんが袋を替えているところだった。

「これいいですか」

そう言ってゴミを捨てさせてもらおう。

私の顔を覚えていてくれたのか、丁寧にありがとうございますと言ってもらえた。

心の中でこちらこそと返し、頭を下げる。

そして私はそのまま来た道を引き返す。

右手には絵の具の入った黒いビニール袋を持って。

直進して、一つ目の角を曲がる。

すると、目の前には再び見慣れない景色が広がっていた。

慌てて左手の地図を見ようとして、

そのときはじめて、左手に何も持っていないことに気が付いた。

——地図がない。

ポケットや、袋の中にも、どこにもなかった。カバンは開けてもいないので、その中にはもちろんない。

つまり……、

「地図、なくした……」

とっさに後ろを振り向いた。

見える範囲にはもちろん落ちてはいなかった。

公園まで引き返して、座っていたテーブルのあたりを探す。

が、やっぱりない。

コンビニの前まで行くが、ゴミ箱の中身はすでに新しい袋に取り替えられてしまっていた。店の中を覗けば、店員さんが忙しそうにレジを打っている。

「……ふーむ……」

私は少し考える。

店員さんに頼んで、さっきまとめたゴミ袋を漁らせてもらおうか。が、そもそも、ゴミと一緒に捨ててしまった可能性が高いとはいえず、絶対ではないのだ。店員さんと呼んで、ゴミ袋を持って来てもらって——それでもないということになれば……迷惑をかけるだけになってしまう。

「うーん……」

やっぱりここは、店員さんに事情を話すわけにはいかないかな……。

まあ、しょせん地図一枚なのだ。そんなに大げさに慌てる必要もないかもしれない。

なんといっても、一度来た道なのだ。実際に歩いてみれば、何と

かなるんじゃないかと思う。

行きならまだしも、帰りなのだ。後はとにかく家に着けばいいだけなのだから。

私は地図は諦めて、記憶を頼りに自力で歩いてみることにした。
(まあ、大丈夫じゃないかな。そのうち、すぐ見慣れたところに出ると思うし……)

私は再び道に戻る。

もう一度さっきの角を曲がる。立ち止まってよく思い出してみる。

——そうだ、このあたりではまだ道路を渡ったりはしなかったと思う。そんなに複雑な道でもなかった。つまり、道なりに進めばいいんだ——。

歩道の赤い地面に目を落とす。

そう、こんな道だった気がする。きっと、合ってる。

「よし」

こうして、ゆっくりでもいいから、ひとつひとつ思い出してけば大丈夫だ。

絶対に迷子になったりはしない。ちゃんと家にたどり着ける。

だって、家では今もお母さんが待っているんだから。ちゃんと遅くならずに、帰らなくてはいけないのだから。

その6

数十分後。

「迷った……」

私は見事に迷子になっていた。

見たこともない四車線の道路わき、赤いレンガ模様の歩道をとぼとぼ歩きながら、途方にくれる。

完全に自分がどこにいるのか分からない。建物も道もすべてに見覚えがなく、だいたいの見当を付けることすらできない。

距離的には家からそう離れていないはずなのに、まるで別世界に來てしまったかのよう。

焦りと不安で身体が汗ばんでくる。

が、道が分からないからといって立ち止まっている訳にもいかないのだ。

私はどこへ向かっているのかも分からないままに、足を動かし続けた。頭の中に、「こんなんじゃない帰れる訳がない」という考えをこびりつかせながら……。

とりあえず、周囲のあらゆるものに注意深く視線をさまよわせながら進む。何か見覚えのあるものが見えてくるのではないかと期待して。

ただどこくら歩いても、やっぱり知らない風景が広がるばかりだった。

（このまま遠くに行っても、もっと迷うだけかもしれない……）

そう思った私は、來た道を引き返すことにした。

今度は、逆方向に同じだけ歩いてみようと思った。

——試行錯誤である。

一つの交差点を目印にセットして、そこから東西南北に同じだけ歩いてみたが、それでも心当たりのある場所は見つからなかった。

（——絶対におかしい。これだけ歩けば、どこかに出てもいいのに

……。それとも、もっと先なのかな？ まさかこの交差点自体が、そんなに外れた場所にあるってことは……)

行きは地図ばかり見ていたから、あまり周囲の景色に気を配っていなかった。

私は完全に行き詰まっていた。

仕方なく、まだ通ったことのない道に足を踏み入れてみる。

困りながら歩いている私の前に、交番が姿を現した。

交番といえば、迷子の駆け込み寺だ。私も困ったことあがあれば交番に行きなさいと常々言われている。

(でも……)

私は何食わぬ顔をしてその前を通り過ぎた。

なぜなら、この年齢だとまず間違いなく保護者を呼ばれてしまうから。

そんなことになったら、お父さんが家にいない今、ここにやってくるのはお母さんということになってしまう。

それだけは、絶対にあってはならない。

だって、そんなことになれば、私がおつかいに出てきた意味さえもなくなってしまうじゃないか。

こんな情けないことでお母さんに迷惑をかけるようなことがあれば、この先どんな顔で一緒にいればいいのか分からなくなる。

今回は、どうしても一人でやり遂げないといけないのだ。

最後まで。

通り過ぎるときに中を覗いてみると、制服姿の警官が机に座って仕事をしていた。

私は目を合わせないようにして早足で駆け抜けた。

さらに数十分が経って。

私は同じ道をぐるぐる回ったり、転んだり、休んだりを繰り返して、——前よりもさらに深刻に迷っていた。

「……」

あまりにも転びすぎたせいで、服がどろどろになってしまっている。

——ああ、これで百点はなくなったな。

そう思う。

これだけ時間がかかってしまい、さらに服まで汚してしまったのだ。もう高得点は望めない。

お母さんは、私のことを使えないバカな子供だと思うかもしれない。

「……うぐ……」

あまりにも残念で涙がこぼれた。

私は道を歩きながら、ひとりうつむいてすすり泣いた。あまり大きく泣いてしまうと、周りの大人に不審がられて警察を呼ばれる可能性もあった。だから、誰にも見つからないように静かに泣いた。

○×堂を出たときは、百点とは言わないまでも、それに近い成績を残せるものだと思っていた。なのに、ここ一時間ほどでどんどんと点数は下がっていった。

もしも帰れるとして——家に着くまでに一体何点残っているのか。

「……んぐ……」

でも——。

お母さんは画材を必要としているのだ。

私はどうなろうと関係ない。嫌われても、怒られても。

ただ彼女の役に立てるのならそれでいい。

そう。だから、がんばって帰らなくては。

私は涙を拭いて、疲れて重くなった足を前に進めた。

※

ずっしやあああああ——。

かっこよく言うと、九回裏ライト前ヒットで二塁からホームに突

入するランナーのように——私は見事なヘッドスライディングを決めていた。

かっこ悪く言うと、何もない道路で私は一人、ずっこけた。アスファルトに倒れ伏したまま、痛みに顔をゆがめる。

上体を起こして膝を見る。血は出ていないが、お気に入りソックスが破れてしまっていた。

「……ふあ……」

言いようのない悲しさがこみ上げてくる。それは一瞬で心の容量いっぱいになって、堰を切って溢れ出た。

「ふああああああああああああああん」

私は泣いた。

もう最悪だった。泣き面に蜂とはこのことだ。

道に迷ってわけが分からなくなる。時間はどんどん過ぎていき、体力はみるみる減っていく。転びまくる。そして服がどろどろになる——どころか、ここにきて破れてしまった。

これはもうダメだと思う。あまりにも希望がない。

もう自力では家に帰れないのだと覚悟した。

——心が折れた。

もういい。充分だ。こうなったら、誰か大人に助けを求めよう。それで、お母さんが迎えに来てくれるのを待つしかないのだ。

私がバカな子供だったんだから仕方ない。作戦は失敗にて終了。もう終わりだ。私にはどうしようもなかったんだ。

次に人が通ったら、その人をお願いしてみよう。

「ぐす……」

——でも、派手に転んだな。なんでだ。どうしてこんな何もない道で転ぶかな……。

私はそう思って背後を確認。

するとそこには、見た覚えのある小石がひとつ、落ちていた。

それを目にした瞬間、私の身体は雷に打たれたように硬直した。

私が転んだもの、それは、ちっぽけな小石だった。

見覚えのある小石だった。

「……あれ……これ……」

とっさに頭を振って周囲を確認。立ち上がって三六〇度見回してみる。

「……ここ……知って……」

行きでもここで転んだんだ。今と同じように膝がめちゃくちゃ痛かった。だから、その道端の陰で休んだ。そう、ちょうどこの辺り。

私は痛みも忘れて興奮していた。

だって、ここがあの場所だとすると、家からものすごく近いことになる。

いや、でも、間違いない。ここは間違いなくあの場所だった。

——気付かないうちに、こんなところまで帰ってきていたなんて。もう、家が近い。

私は歩きつづけて、自分でも知らないうちに、迷路を抜けていた。

その7

ちょっと信じられないような気分のまま、それでもきつとこれが正しい道なんだと願いつつ歩いていると、

「バウバウバウバウバウ！」

「ぎゃー！」

犬に吠えられた。

しかもガレージの中、黒い柵の向こう側から。

私はまたもや泣きながら逃げた。

「ぜえぜえぜえ……」

行きとは逆方向に走り、またしても電柱に背を預けて息を整える。そして思う。

——自分はまったく成長していないと。

「……でも……、これではつきりした……」

そう、もうすぐきつと、見慣れた風景が広がるはずだ。

そして、見慣れた風景どころか、自分の家そのものが見えてきた。私は歓喜のあまり、叫びそうになってしまう。

が、歯を食いしばって我慢。

走り出したい気持ちもぐつとこらえて、ゆっくり歩いた。

（——きつとお母さんが出迎えてくれるんだ……。ちゃんと呼吸を整えておかないと……）

一歩一歩確かめるように家に近づく。

感動して泣きそうになるのもこらえる。涙は禁物だ。たとえウソでも、こともなげにやったということをアピールしなければならぬ。い。

やがて家の前に到着。

私は大きく息を吸い込んでインターフォンを鳴らす。

家の中からどたどたという足音が聞こえて、ドアが開く。そして、

その向こうから心配そうな顔をしたお母さんが現れた。

私はどろどろの格好で、泣きはらした目で——しかし態度だけは何ごともなかったかのように装う。

黒いビニール袋を黙って彼女の胸に差し出した。

お母さんはそれを受け取りながら、「どうしたの」「何があったの」「大丈夫?」と必死になって聞いてくる。

もちろん私は大丈夫だからと言い張って、彼女を手で制するのだった。

お母さんはなおも心配そうな顔をしていたが、頑なに平気だと言いつける私に根負けしたのだろう、それ以上事情を聞くのを諦めたようだった。

かわりに、おだやかな笑顔を浮かべて私の頭を撫でてくれた。

「おつかい、ありがとうね」

「——っ!」

その言葉を耳にした瞬間、私の身体の中で喜びが爆発した。

が、お母さんがいる手前、飛び跳ねるわけにもいかない。心の中で一人地味に喜びを噛み締めるのだった。

ああ、確かにいろいろとトラブルはあった。けれども、自分はおつかいをやり遂げることができたのだ。お母さんの役に立つことができたのだ。

自分を誇りに思った。

そして、これできっとお母さんも私のことを好きでいてくれるはずだと思った。

安心した。

その後、お母さんにシャワーで身体を洗ってもらった。

これが終わったら、買ってきてくれた絵の具で絵を描いてあげると言われた。

描いている最中のお母さんも見てみたいとお願いすると、もちろんいいよと言ってもらえた。

私は髪の毛を濡らしたまま、全裸できゃっきゃと喜んだ。

※

お風呂から出てバスタオルで頭をこすり、生乾きの髪の毛のまま部屋着に着替えた。そのままお母さんを待たずに階段を駆け上がり、部屋に入る。

ドアを開けて中に入ると、やっぱりそこはあの画材屋さんと同じ匂いがしていた。絵の具の匂いだ。

改めて思う。私はこの匂い、嫌いじゃない。

待ちきれない思いで、カンバスの前に陣取った。これから絵が描かれるであろう真っ白な画面を見上げ、今か今かと興奮に身を揺らす。

しばらくすると、お母さんが部屋に入ってきた。

「おまたせー」

彼女は、お父さんのエプロンを身に着けていた。絵の具が飛び散って、元の柄がわからなくなってしまった大きなエプロン。

いつも写真で見ていた凛々しいエプロン姿とは違い、家での彼女はどこか可愛らしい感じがした。

手にはパレットや筆、そして私が買ってきた絵の具の入ったビニール袋も握られている。

お母さんは着々と準備をすすめ、そして私のすぐ後ろに自分の座る椅子を置いた。

私はちょうど彼女とカンバスに挟まれるようにして立っていた。

その私の頭の上で、お母さんの手が動いている。私は跳ねる心臓を抑えつけながら、なるべく動かないように気をつけた。お母さんの腕の下にいるのだ、邪魔になってはいけない。

彼女が私の買ってきた絵の具を袋から取り出そうとしていた。

私は自分の成果をこの目で確かめようと、下から首を伸ばして手元を覗き込む。

が、そこで私は――背筋も凍る思いに襲われた。

黒いビニール袋、その中では――絵の具の外箱が壊れ、12色の絵の具がそれぞれのチューブから漏れてぐちゃぐちゃに混ざり合ってしまったっていたのだ。

「――っ！」

声も出なかった。

心臓が止まってしまったかと思った。全身に脱力感が満ちて、立っていられなくなる。そっとお母さんの椅子に手をついて倒れないよう身体を支えた。

私は蒼白な顔で思い出していた。

おつかいの最中――行きでも帰りでも、転びまくっていたことを。目的のものを買うことができた喜んで、ビニール袋を振り回していたことを。

道に迷ってから是一切の余裕がなく、手に持った袋の中身なんて気にしていなかったことを――。

自分がまったく意識を向けていないあいだにも、現実には箱が砕け、チューブが破れ、中で着々と絵の具は混ざり合ってしまったっていたのだ。

愕然とした。

――私はバカだ。

瞬間的に涙が溢れた。

――うまくできたと思っていたのに。全然そうじゃなかった。逆に、全部無駄になった。

私は自分のバカさ加減にショックを受けていた。

消えてしまいたい思いだった。走って逃げようにも、足が動かない今はどうしようもなかった。

私は今日何度目かも分からない嗚咽を漏らした。お母さんの目の前であることも気にする余裕がなかった。

絵の具を買ってきてと頼んで、こんなぐしゃぐしゃな状態で持っ
てこられたら、誰だって怒ると思う。私だって怒るし、がっかりす

るだろう。

——ああ。

私は尊敬するお母さんに、がっかりされてしまっただ……。そう覚悟した。

そんな私の前で、彼女は何も言わず、ビニール袋を器用に折っていく。そして、底がちょうどパレットの役割をするようにめくり返したのだった。

ぐしゃぐしゃに混ざり合った絵の具から、ピンポイントで筆に色を取っていく。

私はただ黙ってその筆の動きを見つめていた。

その筆先は、私の頭を軽々と超えて、真っ白いカンバスに触れた。まさかあんなぐちゃぐちゃに混ざり合った絵の具から、こんなキレイな色が生まれるのかというほどの、青。

一瞬のうちに、カンバスの上半分に澄んだ空が広がった。

私は啞然として、泣くことも忘れて画面に見入った。

お母さんは何も言わずに、ただ私の頭上で手を動かし、カンバスに色を置いていく。次々と、まるで何ごともなかったかのように。

あんなに汚く混ざり合ってしまったのだ。もう一度買い直さなければ、ろくな絵は描けないと思っていた。

なのに。

お母さんは空に雲を浮かべ、風にそよぐ草原を生み出し、暖かな大気が感じられるほどの広い景色をあっという間に創り出してしまった。

驚きのあまり声もでない。涙も引っ込んでしまう。私は目を丸くしてその様子を見ているしかなかった。

空と草原、世界ができて——次にどうなるのかと思っていたら、画面のちようど真ん中、そのわずかに下のあたりに彼女は筆を持っていた。

空の青とも、草原の緑とも違う色。

私はどきどきして何が生まれてくるのか期待していた。

お母さんは複雑に色を乗せていき、やがて一人の人間——女の子
だろうか——の、後姿を描き出した。

私は振り向いて、お母さんの顔を下から見上げた。
彼女はなにやら楽しげに「いいから、黙って見ていなさい」とい
う表情である。

私ともう一度画面に目を戻したときには、小さな彼女はさらに色
鮮やかに画面に溶け込んでいた。後姿なので女の子の表情は見えな
いが、前方に向かって足を踏み出しているところだった。

広い世界に向かって、小さな女の子が力強く歩いている。
そういう絵だった。

（やっぱりお母さんは凄い……）

私はえもいわれぬ感動に包まれていた。

私があんなにも台無しにしてしまった絵の具。それを苦もなく駆
使して、こんなにキレイな絵を描いてしまうのだから。

まるで魔法か何かを見ているような気分になる。

今日の嫌なことが全部どうでもよくなるぐらいの、すごい体験だ
った。

これが、世界的な画家の実力なのだ。

私は心の中ですごいすごいと繰り返しながら、なおも完成に向け
てさらさらと動くお母さんの腕を見上げていた。その手は妥協する
ことなく、細部まできっちりキメ細やかにカンバスを彩っていく
のだった。

でも、そんな素晴らしい絵を眺めているうちに、私の胸にはふつ
ふつと一つの感情が湧き出してくるのだった。

それは、嫉妬。

私は、画面の中のその女の子に、嫉妬心を抱いてしまっていたの
だ。

お母さんが描き出すその子は、自信と希望に満ち溢れているよう
に見えた。これから目の前に広がる大きな世界で、輝いていくんだ
という予感がした。

「そう、まさに前途洋洋といった感じなのだ。

——私とは、正反対だと思った。

今日私は、お母さんにこういう姿を見せたかったのに。
でも、ダメだった。

涙が溢れてくる。

そんな私に向かって、お母さんは筆を置きながら言う。

「完成——」

私は涙を流しながらその言葉を聞いた。

お母さんは心配そうに私の顔を覗き込んでくる。

「どうしたの？ 泣いてるの？ なんで？」

私は何でもないと言った。

そんな私を、お母さんは後ろからぎゅっと抱きしめてくれた。

そして言うのだ。

この絵のタイトルは、凜だと。

「——え……」

——凜。それは私の名前。

お母さんが何を言っているのか分からずに、ついつい彼女の顔を
見上げてしまう。

お母さんは穏やかな表情で言った。

「これは、あなたよ」

「え？」

思いがけないことを言われて、私は理解できなかった。

ただ、こう思った。

——ちがう。これは私じゃない。

だって、私はこんなじゃない。こんなに自信にも希望にも満ち
ていない。こんなに素晴らしい子供じゃない。

本当の私はもうどうしようもなく使えない奴で、バカで、ダメな、
クズなんだもん。

「全然違う。私こんなにかっこよくない、だって今日だって——」
そういつて頭を振りながら涙を浮かべる私に、お母さんはただ一

言、

「違うわい」

それでも頑なに否定する私に、こう言うのだ。

「だって、あなたの背中を見ながら書いたのよ？」

言われて初めて、その可能性に考えが及んだ。

カンバスと、私と、お母さんの位置。

私はお母さんの前に立ち、絵を見ていた。実際に彼女は私の背中を見ながら、絵を描いていたのだ。

そう言われてみれば、絵の中の女の子は今の自分と同じ服を着ていた。

「凜を見ながら描いて、それ以外の誰かになっちゃうほど、私は絵が下手じゃないよ」

お母さんが笑いながら言う。

「これは間違いなく凜よ。だって私は凜を描いてたんだから」

これが、私。

私の背中。

そうなんだ。

なぜだか、涙が溢れてきた。

ずっと自信がなかった。

お母さんは私がバカだから帰ってこないんじゃないかと思った。

愛していないからじゃないかと不安になった。

そして、そんな風にしか考えられない自分を嫌だと思っていた。

今日だって、失敗したらどうしようなんてことばかり考えて。ビ

クビクして。

ずっと後ろ向きだった自分。

私はそういう人間なんだと思っていた。

でも。

お母さんによると、それは違うらしい。

もう一度絵に視線を戻す。

これが、お母さんの見ている私の姿だとすると……。

涙が溢れた。

私は、本当に何も正しく見えていなかったのかもしれない。自分のことも、お母さんのことも。

一人で、内々に、どんどん悪く考えていつちやって。

無意味に苦しんでいただけかもしれない。

この絵を見て、そう思った。

私はお母さんの胸に飛びついて泣いた。

お母さんが帰ってきてはじめて、本当の自分を出していることも気にせずに。まるでもつとずっと小さな子供のよう。

人形ではない私が、そこにいた。

その8

翌日。

「じゃあ、行ってきます」

お母さんが大きな荷物を二つ持って玄関口に立っていた。

小鳥がさえずり、朝の眩しさが目に痛い午前八時。

私はまだパジャマ姿のままだったが、それでも胸を張って彼女を見送った。胸には額縁に入れてもらったあの絵を抱きかかえて。

本当は泣いて「行かないで」と言いたいところだったが、私はそんな衝動をぐっところえて真っ直ぐにお母さんを見つめていた。

もう、私は怖くない。

お母さんは私のことを愛していてくれると分かったし、自分のことがどうしようもないクズだとも思わなくなった。

すべて、この絵が教えてくれた。

そう、この絵の女の子は私なのだ。

だから、私はこの後姿に恥じない自分でいるべきなのだ。

お母さんがドアを開けて出て行く。

次に会えるのはまた数年後かもしれない。

だけど、私は満面の笑顔で彼女を見送るのだった。

彼女が安心して出発できるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1980/>

凜、初めてじゃないおつかい

2011年5月5日05時55分発行